

分布域を狭めた鳥類の生態学的特性

天野達也（農環研）・山浦悠一（森林総研）・山本勝利（農環研）

減少している種の生態学的特性を明らかにすることは、絶滅リスクの高い種タイプの理解につながり、限られた調査努力や保全努力を有効に配分するために重要である。本研究では、自然環境保全基礎調査（環境庁 1980, 環境省 2004）で得られたデータを用い、分布域を狭めた繁殖鳥類種の特性を明らかにした。各種の分布域減少の指標としては、全国の 20km メッシュを対象とし、生息が確認されたメッシュ数のここ 20 年間での減少率を利用した。検証した生態学的特性は、体サイズ、繁殖力（一腹卵数×年繁殖回数）、巣の高さ、利用する生息地タイプの数、配偶システム、集団繁殖の有無、長距離渡りの有無、分布域の広さ、農地利用の有無、である。

系統関係に基づいてデータの非独立性を考慮した解析を行ったところ、ここ 20 年間で生息確認メッシュ数が減少していた種は、（１）中程度の体サイズ、（２）低い繁殖力、（３）低い場所での営巣、（４）単独繁殖、（５）長距離渡りを行う、（６）農地を生息地として利用する、といった特性をもっていることが明らかになった。

これまでの理論・実証研究に基づいて考えると、（１）～（３）の結果については、日本で繁殖する鳥類が生息地の消失や分断化の影響を受けている可能性を示唆している。一方、長距離渡り鳥や農地性鳥類の減少はこれまで欧米を中心に多く報告されており、渡り鳥では越冬地や中継地での影響、また温暖化の影響が、農地性鳥類では農業活動の影響が、その減少機構として考えられている。集団繁殖が個体群の維持に貢献する機構は今後の研究の課題である。

以上の結果から、今後の日本における鳥類の保全問題では、本研究で明らかになった特性をもつ鳥類種にも調査努力や保全努力を配分し、その減少機構を明らかにするために、特に生息地の消失・分断化、長距離渡り、農業活動の影響、といった現象に注目すべきだと考えられる。